

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 24 日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2017

課題番号：16K13284

研究課題名(和文)7世紀東アジア世界における文化的多様性とその淵源についての研究

研究課題名(英文)A Study of Cultural Diversity and Its Origins in the World of Seventh-Century East Asia

研究代表者

佐川 英治(SAGAWA, Eiji)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授

研究者番号：00343286

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文):中国では589年に隋が陳を滅ぼして中国を統一し、隋唐が中国の正統王朝としての地位を確立する。しかし、日本では7世紀にはまだ朝鮮諸国を介して南北朝にもさかのぼる重層的な大陸文化を摂取しており、大宝元年(701)の大宝律令を境としてようやく体系的な唐の制度を取り入れ始めたということが、近年の日本史の研究者のなかで言われるようになってきている。そのような事実の一つとして、『周礼』型といわれる藤原京から唐長安城型といわれる平城京への都城プランの変化がある。本研究はこうした東アジアの文化的多様性の淵源が3世紀以降の東アジア世界における文化的中心の拡散と多元化にあることを明らかにした。

研究成果の概要(英文): In 589, the Sui overthrew the Chen and unified China, and the Sui-Tang established its position as China's legitimate dynasty. But in recent years some researchers of Japanese history have been saying that in the seventh century Japan was still absorbing, via the countries on the Korean peninsula, a multilayered continental culture going back to the Northern and Southern Dynasties, and that it was only with the Taiho Code (Taiho ritsuryo) completed in 701 (Taiho 1) that Japan finally began to incorporate the systematic institutions of the Tang. One fact indicative of this is changes in the plans for capital cities, to be seen in the shift from Fujiwarakyo, said to have followed the Zhouli model, to Heijokyo, said to have followed the model of the Tang city of Chang'an. This study shows that the origins of this cultural diversity in East Asia lay in the diffusion and multipolarization of cultural centres in the East Asian world from the third century onwards.

研究分野：中国古代史

キーワード：中国古代史 都城 東アジア史 古代末期

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究の着想は、2016年2月に学振の研究成果公開促進費を受けて『中国古代都城の設計と思想 円丘祭祀の歴史的展開』（勉誠出版）を執筆するなかで、藤原京から平城京への遷都に興味をもったことにある。

(2)この遷都の意味については日本史や日本考古学の分野で様々な議論がおこなわれており、7世紀の日本文化と中国・朝鮮の関係のあり方を見直す大きなきっかけになっている。このことを東アジア世界全体の問題へと広げ、7世紀東アジア世界の文化的多様性とその淵源を明らかにすることを目指した。

2. 研究の目的

(1)本研究はヨーロッパの3世紀から8世紀までを「古代末期(Late Antiquity)」とする考え方をヒントに、東アジアの3世紀から7世紀をそれに相当する独特の性格をもった時代として捉え直すことを目指した。東アジア史の「古代末期」を想定することは、今日の中国史研究にとって次のような意味がある。

(2)第一に、ヨーロッパとの共時性を見いだすことで、西洋史学との対話を可能にする。研究が細分化した今日においては、中国古代史の研究者が西洋史の研究者と対話するような機会はほとんどない。本研究は当時のヨーロッパとの共時性を考察することにより、中国古代史研究にもう一度世界的な視野を開こうとする。

(3)第二に、新しい東アジア史の可能性を開拓することである。東アジア史の理論については、すでに西嶋定生の冊封体制論があるが、冊封体制論は東アジアにおける国際関係の構造を明らかにしたものであって、総体としての東アジア世界のダイナミズムを把握するのに十分ではない。本研究では漢帝国崩壊後の秩序の再建は、漢の影響を受けた東アジアの諸民族や新開地によってそれぞれ主体的に担われるようになったという認識のもとに、冊封体制論とは異なる東アジア世界の歴史叙述を目指した。

(4)第三は、中国史の新たな捉え直しを提起することにある。従来10世紀までを古代とする考え方には東アジアの視野があるが、3世紀以降の中国に生じた民族や宗教の問題が軽視されている。一方、3世紀以降を中世とする考え方は対象が中国に特化されており、東アジア全体を含む視野に欠ける。本研究は3世紀から7世紀を独自の時代と位置づけることで、こうした従来の時代区分論の限界を超えることを目指した。

3. 研究の方法

(1)当該時代の歴史を研究する国内外の中国史・日本史の研究者による研究チームを組織し、隋唐文化の歴史的性格、7世紀の唐と朝鮮・日本、南朝文化と東アジア、「古代末期」論などをテーマに研究会を重ね、議論を深めた。

(2)国内で問題意識を共有するため、国際シンポジウムを開催した。また国内の学会で研究発表をおこなったり、論文を発表したりすることを通じて研究を進展させた。

(3)海外の研究者と問題意識を共有するため、積極的に海外の国際学会に参加して研究発表をおこなったり、論文を発表したり、講演をするなどした。

4. 研究成果

(1)「古代末期」論を参考としつつ、7世紀の東アジアの各地域に展開した中華文明の多様性を、中心と周縁、先進と後進の差異としてではなく、漢帝国以後の中華文明の広がりとは異なる、多様化の帰着としてとらえる研究をおこなった。この研究では東アジア世界が多様化していく画期を皇帝の称号、遊牧社会とのかかわり、仏教の広がりなどの面から検討し、383年の淝水の戦いが特に大きな画期となっていることを明らかにした。そしてその成果を山川出版社の「歴史の転換期」シリーズの第2巻、南川高志編『失われた古代帝国の秩序』(2018年6月刊行)の第4章「漢帝国以後の多元的世界」にまとめた。本論では淝水の戦いが、中国の一元的な支配による統一の最後の試みであり、東アジア世界が多元的な世界へと変容していく転機であったことを明らかにし、ヨーロッパにおいてローマ帝国の後退が決定的となった378年のアドリアノーブルの戦いに相当する世界史上の画期であったことを示した。

(2)研究分担者、研究協力者と協同し、東京大学で国際シンポジウム「中国中古代史像の再検討」を開催し、80名近い研究者の参加を得て成功を収めた。本シンポジウムの成功については「2016年の歴史学界 回顧と展望」(『史学雑誌』126編5号、2017年)の「魏晋南北朝」の項目で「佐川によって魏晋南北朝時代の歴史的意義を世界史的視座で以て問い直す時が来ているという問題提起がなされ、次いで貴族制・賤民制・空間及び時間の価値意識に関わる個別報告と、論議が行われた。評者はここに、先学の提起を承けて一九七〇年前後生まれの研究者による「再検討」が始まったという、画期とも表現すべき印象を受けた」(198頁)と評された。

(3)中国と日本の都城制について研究し、中国では魏晋南北朝時代に北朝系都城と南朝

系都城に分化したこと、そして藤原京は南朝系都城の系譜に、唐長安城や平城京は北朝系都城の系譜に位置づけられることを明らかにした。この成果を国内外の学会発表や講演、論文などを通じて発表した。

(4) 以上の研究を多面的に検証し発展させていくため、新たに韓国古代史の専門家として獨協大学の小宮秀陵講師を研究分担者に加え、また国内外の中国史・日本史・西洋史の研究者の協力を得て、平成30年度～平成34年度科学研究費補助金基盤研究(B)「東アジア史における「古代末期」の研究」を申請し、採択を得た(課題番号:18H00720、研究代表者:佐川英治)。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計6件)

佐川英治、六朝建康城と日本藤原京、黄曉芬・鶴間和幸編『東アジア古代都市のネットワークを探る 日・越・中の考古学最前線』、汲古書院、2018、205-221、査読無

佐川英治、鄴城に見る都城制の転換、窪添慶文編『魏晋南北朝史のいま』、勉誠出版、2017、153-162、査読無

佐川英治、西郊から円丘へ 『文館詞林』後魏孝文帝祭円丘大赦詔に見る孝文帝の祭天儀礼 (中国語)、『中古中国研究』、1、中西書局(上海)、2017、1-26、査読無

河上麻由子、日本古写経中『広弘明集』巻二十二と巻三十を中心に (中国語) 南京大学域外漢籍研究所『域外漢籍研究集刊』、15、2017、253-278、査読有

小尾孝夫、建康とその都市空間、窪添慶文編『魏晋南北朝史のいま』勉誠出版、2017、163-173、査読無

河上麻由子、『広弘明集』巻一七について、『日本古写経研究所紀要』、2、2017、29-51、査読有

[学会発表](計9件)

佐川英治、都城制の画期をめぐる歴史学と考古学—曹魏の鄴と洛陽の復元を中心に、日本中国考古学会 2017 年度大会、2017

佐川英治、唐長安城の朱雀大街と日本平城京の朱雀大路 都城の中軸線からみた日中の政治文化、唐代史研究会夏期シンポジウム、2017

佐川英治、鄴城に見る中国都城制度の転換(中国語)、中国魏晋南北朝史学会第十二届年会暨国際学術研討会(邯鄲)、2017

佐川英治、六朝建康城と東アジア都城(中国語)、「六朝歴史与南京記憶」国際学術研討会(南京)、2017

小尾孝夫、墓葬区域の変遷に見る六朝建康の郊外発展と都市空間(中国語)、中国魏晋南北朝史学会第十二届年会暨国際学術研討会(邯鄲)、2017

小尾孝夫、六朝建康墓区の変遷およびその郊外への拡大(中国語)、「六朝歴史与南京記憶」国際学術研討会(南京)、2017

佐川英治、書評:全徳在『新羅王京の研究』、朝鮮史研究会関東部会 11 月例会、2016

河上麻由子、論日本古写経中広弘明集(中国語)、第四屆仏教文献与文学国際学術研討会会議(杭州)、2016

河上麻由子、仁寿舍利塔建立事業与広弘明集(中国語)、第四屆中國中古史前沿論壇 中古新政治史研究(上海)、2016

[図書](計1件)

佐川英治 他、山川出版社、『378 年 失われた古代帝国の秩序』、2018、176-229

[その他]

(学術講演)

佐川英治、古代東アジア都城の理念(中国語)、復旦大学文史研究院(上海)、2016

佐川英治、古代東アジア都城の理念(中国語)、人民大学歴史学院(北京)、2016

(シンポジウム開催)

中国中古史像の再検討、東京大学、2016

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐川 英治(SAGAWA, Eiji)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号:00343286

(2) 研究分担者

河上 麻由子(KAWAKAMI, Mayuko)
奈良女子大学・人文科学系・准教授
研究者番号:50647873

小尾 孝夫(OBI, Takao)
大東文化大学・文学部・講師
研究者番号:90526675

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

河内 春人 (KOUCHI, Haruhito)

戸川 貴行 (TOGAWA, Takayuki)

金 秉駿 (KIM, Byungjoon)

趙 晟佑 (CHO, Sungwu)

魏 斌 (WEI, Bin)